

旭の森

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

建長五年四月二十八日、

所は、房州清澄山の頂きである。この題目の一声一声に樹海の彼方、水天彷彿たる処より、今、日輪が昇って行く……。

昔釈尊は成道の砌り、三・七日間、天地法界を相手にして説法をされ、自らの悟りを開陳されたという。蓮長もまた、天地法界を対告衆として、己れが十五か年間にわたる仏法研鑽の結果を南無妙法蓮華經の七字に結要しての説法であつた。

七日間の禅定を終つた蓮長は、満願の日たる四月二十八日、まだ夜の明けざるに清澄山の頂きに登られた。

釈尊は暁の明星いずる頃に大悟徹底せられたと伝えられるが、その明星が次第に影うすれて、水天一髪の処に、日輪の片影をみる時、清澄山上、朗々たる題目の声が、しずもる樹々の小枝に響き渡つたのである。

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

蓮長の題目がこの日輪を昇らせてゆくか……。

日輪が、六尺三寸堂々たる体軀の蓮長の口を開かせたのか……。

それはいずれでもよい。

「日蓮を恋しく思わば、日輪を拝ませ給え、時折影を映すべく候」

とは蓮長が後年の述懐である。

日輪と蓮長、彼此区別なく混然一体たるの境地であつたのだ。

みよ！

今は水平線上に、その円体を現わした日輪は、円周の静に反比例して、その中心は、たぎり立ち、湧き立ちおどり狂うかのごとき、灼熱の球体である。蓮長の唱うる題目もまた然り……満山

を圧して、朗々たる清涼の響きこそもつが、これを唱うる蓮長の胸裡に一度直入してみれば、やはり、たぎり立ち、湧き立ち、おどろ狂うの動的な境地であつた。

仏滅後、二千二百二年の今日、四月二十八日こそ、仏が予言せられた法華經にいうところの、「斯の人」が、世間に法を説くの第一日であつたのである。

『斯の人世間に行じて

よく衆生の闇を滅す』

とは法華經神力品の掲文である。仏滅後二千二百二年の間、何千何万の僧侶がこの法華經を読んだことであろうか。だが、だれ一人この二行の掲文を、否「斯の人」というたつた二字を読み得なかつたのである。

僅かに天台伝教の両大師が、法華經は末世において流布するであろうと予言されておる。だが然し、「斯の人」とは如何なる人であるかは知り得なかつた。

両大師が末法に於ける、法華經流布の予言も、奪つて言えば、学説でもなく、法華經の説である。その説をそのまま説明したに過ぎないのである。

今の蓮長の気持から言えば、天台大師も伝教大師も最早頼みにならぬ、驚天動地の境地に到達して叫ぶ処の、それは、

南無妙法蓮華經

であった。

「このこと日蓮たしかに、教主釈尊よりまのあたり、靈鷲山において面授口決せり」と言う、天台伝教迦葉阿難等を遙かに飛躍しての境地において唱える、

南無妙法蓮華経

であった。

実行の面において言うならば、天台も伝教も亦八宗十宗の祖師方も、およそ仏道に志した何千萬の人々が未だ曾て歩まざる、茨の道をゆかねばならぬのであった。「日本国に此を知れる者日蓮一人なり、これを一言も申し出すならば、父母兄弟師匠に国主の王難必ずきたるべし」と覚悟して唱える。悲痛なる

南無妙法蓮華経

である。

おもえば、天福元年五月十二日、蓮長は当時十二歳、善日麿と称して稚子髻姿のいとい児童であった。父親に伴われて、千光山清澄寺に、出家得度しようとして山に登る道すがら、

「父上、善日麿はうんと勉強して、うんとえらい坊様になりますぞ」

と言った時、父親の貴名次郎重忠が、善日麿を諭した言葉があった。

「善日麿よ、よう聴いて忘れてはならぬぞ、日本にはえらい人は沢山おるのだ。又歴史上にもえ

らいと言われる人々は、数えきれぬ程おる。たが、正しいと言われる人、正しいと言われた人は、まだ一人もおらんのだ。だから、磨は、えらい人になろうなぞとは心掛てはならない、ただただ正しい人になれ、日本第一の正しい人と、人にも言われ、自らも言える人になることを心掛ければならない」と言われたことがあった。

正しい人。正しい人。

今この正しい人に蓮長はなつたのである。しかして仏法における最も正しい叫び声は、

南無妙法蓮華経

より外にはなかつたのである。だが然しこの正しい人が行くべき道は「但日蓮一人許りこのことを知りぬ、ありのままに申すならば死罪となるべし、たとい死罪は免るとも流罪は疑いなかるべし」と言う苦難の道であつたのである。

大洋の一線上より出て虚空にかかること四五寸の日輪は、あの海よりおどり出る時の真紅の色を、平静の白熱に戻して、今は万物育成の母なる静かな姿に変わっていた。題目を唱えること数十遍、清澄山頂を下る蓮長の姿は、凡眼には何等変化心ないが、実は、「末法に於て仏とは凡夫なり」の確信を胸中に秘しておるのであった。

